令和８年度　第１回滋賀県環境学習等推進協議会　議事概要

日時：令和８年９月７日（月）10 時 30 分～12 時
場所：環びわ湖大学・地域コンソーシアム　セミナー室
出席：委員 13 名（欠席４名）
　　事務局（環境政策課、琵琶湖博物館環境学習センター、幼小中教育課）
　　オブザーバー（高校教育課）

■議事（１）「第四次滋賀県環境学習推進計画」の進行管理（令和７年度）について
　資料１に基づき、事務局（環境政策課）から説明

会長
- 環境保全行動実施率の低下について、質問文の「積極的に行っている」という表現が引っ掛かっている可能性も考えられるとの説明があったが、前年度にも同様の選択肢になっていたのか。＜資料１，p.7＞

事務局
- 前年度から変えているものではない。

委員
- 県政モニターは前年度から同じ方も居られるのか。居られる場合は、その率が知りたい。＜資料１，p.7＞

事務局
- 県政モニターは毎年募集をしており、基本的には同じ方は居られない。
- 300 名に協力いただいており、アンケートの回答数としてはそれより少し人数は減るが、県全体の年齢や地域比率などと合致するように按分し、県全体の意見をなるべく反映できるように選定されている。

委員
- 湖東地域と湖北地域の環境保全行動実施率について、昨年と一昨年で同じような傾向で低いが、事務局サイドで要因として考えがあれば教えてほしい。＜資料１，p.7＞

事務局
- 以前からこのような傾向が出ており、毎回要因を考えはするものの明確な理由はわかっていない。過去には、地域によるごみの分別方法の違いなども考えてみたものの、明確な理由はわからない。
- 環境保全行動実施率の低下に関する補足として、アンケートの中で、環境問題への関心度を質問しており、令和６年度が 92%、令和７年度は 91%との結果で、特に差は見ら

れない。また、環境保全行動を「あまり行っていない」「全く行っていない」と回答した方に、環境保全行動を行わない理由を聞いているが、これも令和６年度と令和７年度で大きな差は見られない。両年ともに、最も回答の多かった理由が「仕事や家事などで時間がない」。次点が「どこでどんな環境保全行動が行われているか等の情報がない」とのこと。

委員

- 県政モニターアンケートの問４で「次のうち、大切だと思う環境保全行動を教えてください」として選択肢があり、次の問５で「あなたは、問４で挙げたような環境保全行動を日頃行っていますか」という問いに続く。この質問は、選択肢全体に対してそれぞれがどれだけ実施できているのか、というものなのか、或いは問４でそれぞれが回答した大切だと思っている行動に対してどれだけ実施できているのかという質問なのか。後者であればもう少しポイントが上がりそうだが、いかがか。＜資料１，p.7、参考資料＞

事務局

- 実際の設問では「問４の選択肢の中で１つでも取り組んでいるものがあれば、それに対する意識、積極性について御回答ください。」という問いになっている。
- 御懸念の通り、前の設問に引っ張られている可能性があるため、次回のアンケートではその点を注意して行う。

委員

- 「大切だと思う環境保全行動」と書いてあるが、全て大切なことばかりのはず。例えば、「次の行動は環境にとって大切な行動です」と言い切ってから質問に入ってもいいのではと感じた。
- また、事務局の「マイバッグ持参等も当たり前になっている中で、あえてそれを自分が意識して取り組んでいるとは回答しづらいのかもしれない」との考察は、その通りかもしれないなと感じた。
- アンケート項目の見直しについて検討していただけるのであれば、マイボトルの利用も環境を意識した行動かと思うので、追加してはどうか。＜資料１，p.7、参考資料＞

事務局

- いただいた御意見を検討したい。

会長

- 数値をあげることだけが本来の目標ではなく、全体のアウトカムが上がればいいので、何が課題か、どういった行動、どういった政策が必要なのかを分析していけるようなアンケートをお願いしたい。

■議事（２）琵琶湖博物館　環境学習センターの事業について
資料２に基づき、事務局（環境政策課）から説明

委員

- 今年度になってからすごく積極的に活動してくださっていることがよくわかった。
- 昨年度の実績を見ると、例えば「竹蛇篭編み体験」は難しい内容とは言え参加者５人とのことで、１つの事業として捉えられるのか疑問だったが、今年度はイベントの数も増え、内容も団体連携があって良くなってきていると感じた。これを継続してほしい。
- 魚に関するテーマが多いが、環境学習センターは広く環境に関わる組織だと思うので、森林や地球温暖化など、テーマを広げる方向性はあるのか聞きたい。＜資料２＞

事務局

- 森林政策課主催のオータムフェスタへの出展を予定しているところ。双眼鏡を使った生き物探しを予定しており、冬の水鳥観察につながる機会にもしたいと考えている。
- また、8/27 に世界湖沼の日を記念した琵琶湖保全再生課主催のイオンモール草津でのイベントにも出展したが、今後は他分野のイベントにも出展するなど、琵琶湖博物館と環境学習センターの認知を広げていきたい。
- なお、今年の琵琶湖博物館の 30 周年企画展が「魚類学者が見た琵琶湖」という趣旨の企画であるため、今年度は魚や標本、記録を残すということを中心に発信する狙いである。
- 資料記載の今年度事業は暫定であり、地域の方々を巻き込んだイベントは今後も企画していきたいと考えている。

委員

- 環境学習を行う上で、それが暮らしにどう関わるのかなど、身近なところに繋がると感じてもらうことがとても大事だと思っており、そのような工夫をいろんな面で加えていただけると嬉しい。
- また、長浜で開催されたイベントでは、地域の団体を紹介して、参加者との接点を作るということをされているが、このような機会が地域の身近な団体と出会うきっかけになり、琵琶湖博物館まではなかなか行けなくても、地域の活動に参加するきっかけにつながるのではないかと感じる。
- 安曇川の竹林の整備に関わっている中で、竹について意識を向けて見るようになった。竹林は各地で問題になっており、どんな風に整備していったらいいのか、どう関われるのかということについて、入り口として何かあると良いと思いながら聞いていたが、竹蛇篭もその入口ではないかと感じた。
- 例えば身近なところで、竹を暮らしにどう使えるかとか、折角切ったものを暮らしの身近なところに引き寄せられるような取組もあると良いと感じた。＜資料２＞

事務局

- 個人的な意見になるが、大学生のころ、2010 年に愛知県で開催された生物多様性条約国会議で NGO として参加した際に、放置竹林の間伐材で竹箸を作るというワークショップを国際会議場で２週間実施した。対象は海外の方で、持ち帰れるもので、日本の文化だけでなく、生物多様性保全や環境も知れるということで竹箸作りを実施した。竹箸を切り、削りながらディスカッションし、持ち帰れるというコンテンツはかなり良かったと記憶している。
- このような経験も踏まえながら、博物館、センターとしても、参加者が楽しみながら学べるワークショップを色々と提案していきたい。

■議事（３）令和８年度に滋賀県が実施する環境学習関連事業について
資料３に基づき、事務局（環境政策課）から説明

事務局

- 小・中・高等学校等に対する環境学習関連事業について、実績があまり芳しくない。このような支援が求められているのではないか、この時期の方が案内文に目が留まりやすいのではないかなど、ぜひ御意見を頂戴したい。

委員

- ４月当初の忙しい時期だけではなく、７月にも周知の機会を増やしていただいたというのは非常に有意義なことではないかと感じている。手をつけたいなと思っていてもどこかに紛れてしまったり、年度初めの時期は管理職の先生方も大変お忙しく、情報が流れてしまっているということも考えられるため、非常にありがたいことだと思う。
- 22 番の事業について、「災害が身近なものであることを感じてほしいが、なかなか感じてもらえずその伝え方に苦労している」と課題に挙げていただいている。また、45 番の事業では、「温暖化に関する啓発内容の動画に対して、批判的なコメントが何件か寄せられた」という記載があり、内容が気になる。SNS の発信は届けたいところにプッシュ型で届いたりするケースもあるが、情報の正しさなど、届けたい情報が届けたい人に伝わっているのかなど気になることがあり、もし何か知っていたら、どういう批判があったのかなど聞かせてほしい。＜資料３＞

事務局

- 22 番はこれ以上の情報を持ち合わせていないが、45 番は同質問について事前にヒアリングをしていたので回答させていただく。届いた批判コメントとしては、「温暖化と CO2 は関係ないのではないか」「CO2 が増えることと温暖化には関係がないのではないか」といったコメントが複数件寄せられたということで、その時点で当該投稿のコメント欄を閉じたと聞いている。
- 対策として、今年度は具体的なデータを示して、「このようなデータがあるから、これ

は関係がある」と理解してもらえるように情報発信を行っていくと聞いている。

委員

- まだ若干、温暖化懐疑論者と言われるような方は居られる。大抵の方は分かってくださっているが、根強くそういう方は居られ、尚且つこのような方々はいろんなところにそのような投稿をされているため、恐らくその類のコメントが届いたのではないか。このようなコメントが届いた場合にどのように対処するかというのは、非常に難しいことではあると思う。

委員

- 広報について、課題があるとの記載が多い。参加いただくと満足度は高いが、参加するまでのハードルが高かったり、集客の部分で難しいという話は当社も同じ。参加費無料だとハードルが低くなってたくさん来ていただけるが、有料だと足が重くなる（ハードルが高くなる）。また、民間企業として参加費無料は難しく、有料で自然環境活動をさせていただいている。導入で学びの要素を前面に押しすぎるとなかなか集客が難しいため、導入では楽しいや美味しいなどをフックにしている。来ていただければ、楽しく学びを持ち帰っていただけることは実感しているため、まずは来ていただくきっかけ作りがすごく重要だと感じている。＜資料３＞

事務局

- 環境学習センターでは、県内の方々が実施される環境学習のイベント等も SNS やウェブサイトで発信しており、ぜひ委員の皆様とも連携しながら、相互に情報発信をさせていただきたい。ユーザー目線が一番大事だと思っており、その結果、関心のある方にちゃんと届くと良いと思っている。
- なお、琵琶湖博物館に関して申し上げると、ワークショップ等は参加希望者で溢れている。20 名限定の企画で 70 名から参加希望があり、すぐに締め切るほどで、ワークショップのニーズは感じているところ。そのため、博物館の企画で溢れてしまった人に対して、体験できずに終わるのではなくて、「実は地域ではこういう体験できる」と伝えていくことも大事と考えている。環境学習センターとしては、地域の団体の情報をそうした方に伝えていく努力が必要と考えており、また皆様と情報共有をさせていただきたい。

会長

- 今の時代、情報が氾濫している中で、本当に必要なところにどうやって届けるかというところが課題となっている。これまでの御経験の中で、御知見を共有いただきたい。

副会長

- 小学校の教員として、現場で求められている環境学習の支援について述べさせていただく。小学校の先生方は、単発イベントのような授業ではなくて、一貫したプログラム

として授業を作っている。そのときに一番支援してほしいのは、一緒にプログラムを作ってくれる支援や助言。先生たちだけではできないので、社会と繋ぎ、人との繋がりを広げてくれるような支援。そのような支援があってプログラムが確定してから、漸く今の支援事業で実施されているお金や物品の支援による授業の充実に繋がってくる。そのため、最初の 1 歩の部分への支援が必要と思う。

- そういう意味では、今年度始められた「しが環境学習担い手育成事業」の講座は今後とても重要。この事業にどれくらい学校現場の先生が参加してくださっているかわからないが、このような事業をどんどん続けてほしいと思う。
- また、エコスクールの認定制度が無くなったが、元々はただ単にお金を出すとか物品を提供するような事業ではなかった。私も事業が始まった当初から 20 年ぐらいずっとエコスクールに登録していたが、何が良かったかと振り返ると、認定校同士の交流会や、学び合いの研修会とかがあった。そのときに、プログラムのことが学べたり、人の繋がり、ネットワークができたり、そしてまた次年度も同じような人が入ってくるので、その繋がりがどんどん広がっていき、認定校のプログラムは充実していった。一方で、ここ最近はお金を出すだけで文書として報告を出して終わりという制度になっており、それでは広がらないのでそのままであれば続けなくていいと思う。しかし、その経験をノウハウとして残すのであれば、やはりそういった方々のネットワーク作りをぜひ県でやってほしいと思う。MLGｓのように教員だけではなくて色々な立場の人も入ったネットワークもいいし、環境学習のフォーラムを別に作るにしてもいいが、何か繋がり作りをやってほしいと思う。
- そのような意味では、滋賀らしい環境学習を進めるためには、環境学習センターがすごく重要と思っている。そんな環境学習センターが、これほど相談件数が少なく、エコロしーがの活用や認知度も低いようでは、環境学習を進めてると言えないので、ぜひもっと PR をしていってほしい。県政モニターアンケートの結果を見ても、初めて見た人が「こんなのがあるんだ」と驚くような感想ばかり出て、それで喜んでいてはいけない。「当たり前でしょ。滋賀にはこれがあるんだから」といった言葉を書いてもらわなければいけないと思う。環境学習センターが立ち上がって以来、ずっと認知度が低いと言っている。
- さらに、淡海こどもエコクラブ活動交流会についても、2001 年に滋賀県が全国大会を開催してから 25 年以上続いている。滋賀県は全国でもベスト３に入るくらいこどもエコクラブが多く、それが琵琶湖の環境に特化した環境学習をやっていた。そのため、も一度こどもエコクラブの可能性を見出し、交流を深めていってほしいと思う。以前は、指導者講習として県内の指導者が集まったり、大会の途中に交流会もあった。大会だけ充実するのではなく、それに向けて指導者間のネットワークを作っていくとか、子供の繋がりを作っていくとか、そのあたりの抜本的な改革をしないといけない。長年やってきたことの積み上げがマンネリ化してあまり効果がないからといい、事業開始当時と

形が変わっているにも関わらず、それに気付かずに事業をやめてしまうのは、エコスクール事業にしても、こどもエコクラブにしても、ラムサールびわっこ大使にしても残念に思う。子どもを育てる教師のネットワークが大事なので、そのあたりを改善していってほしい。＜資料３＞

事務局

- 非常に前向きな意見をたくさんいただき、感謝申し上げる。こどもエコクラブに関しては、委員ご指摘のとおり、途中で交流会をやった方が良いのではと議論をしているところ。12 月に交流会は開催するが、10 月や 11 月の段階で、これまで長く活動されている団体の指導者の方や課題を共有する場を作りたいと議論している。本日はそういった方向でいいかなと思いながら議論していた中で、委員から背中を押されたと受け止めている。
- エコスクールに関して、認定制度を廃止した理由は、クラスではなく学校全体の取組となるため、なかなか新規校が増えず、尻すぼみになっていった。また、交流会に参加してくれる学校が少なくなり、交流会の体をなさなくなってきたという実態がある。一方で、認定を止めたら止めたで、「認定制度があったからやっていた」との声もあり、「認定制度を復活させる」話も事務局ではしている。委員のご意見にあったように、先生同士のネットワーク作りにも焦点を当てて改善していきたい。

委員

- 環境保全行動実施率について、例えば働き世代は忙しく１週間分まとめて献立を考えておくというのも食品ロスの削減に繋がっていると思うが、そうは捉えずに回答してしまっている方も居られるため、アンケート項目の聞き方は具体的なものがいくつもあった方が分かりやすいのではないかと思った。
- 湖東地域が低いという点については、愛荘町は使いまわしができる袋を提供して有料で剪定枝を回収しており、ビニール袋の削減に繋がっているはずだが、結果に反映されているのか気になった。
- 環境学習センターの取組について、今回の説明で変容を感じたため、そのような取組の背景などは他の団体にとってもヒントになるはず。このようなことも発信してほしい。

事務局

- アンケートの項目の聞き方については、昔から使ってる部分もあると思うため、昨今の生活の変化などを踏まえて一度見直しを考えてみる。
- 湖東地域の剪定枝の回収など、地域での取組を情報としてどのように取るかという点もあるが、委員の皆様からも、素敵な取組をしているといった情報があれば気軽に事務局まで情報提供いただきたい。そういったことを参考にして、色んな事業を改善していきたい。
- 全体的な部分について、事務局だけでは出てこないような皆さまの意見や知見はやは

りありがたい、とお話を伺って感じているところ。環境政策課では資料３のように全体を取りまとめるという役割があり、環境学習センターはもっと現場に近い立場で仕分けをして進めてはいるが、やはり我々だけでは分からないことがあるため、委員の皆様には、皆様の活動に基づいた御意見を頂ければ幸いである。

■議事（３）その他

委員が持参したチラシに基づき、各担当者から説明

（以上）